

平成30年度 石川県立盲学校 自己評価（最終評価）

平成31年3月19日

重点目標	具体的取組	担当	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
① 授業力の向上	授業参観や授業整理会等を通して授業改善を行う。	教務課	各自の授業力が向上し、児童生徒の学力も向上したと感じる教員の割合が A： 80%以上 B： 60%以上 C： 50%以上 D： 50%未満	A 92%	小100%、中普89%、理88%、全体では92%であった。教員アンケートで最も授業力が向上したと感じた場合を100点として、最終評価時は「視覚障害教育専門性」92点「新学習指導要領への対応」80点「教材教具の活用」89点「生徒からの質問についての説明」85点「形成的達成度」86点であった。最も低い項目に今後集中して対応していく。
	各自の授業を振り返り、授業改善に活かすために、授業の内容や児童生徒の様子・評価等を記録する。		授業が工夫されており、わかりやすいと感じる保護者や理療科生徒の割合が A： 80%以上 B： 60%以上 C： 50%以上 D： 50%未満	A 86%	小100%、中普83%の保護者、理83%の生徒が授業は工夫されており、わかりやすいと感じているが、一部の生徒より説明時には図や標本を適時に活用することや、手順を記す資料等の準備をして欲しいとの回答があった。今後は教材の工夫に力を入れていく。
学校関係者評価委員会の評価		・授業力の向上に関する5項目において、伸びが小さかった「新学習指導要領への対応」の項目を伸ばすには、具体的な指針を持つと良い。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・新学習指導要領が求める主体的・対話的な深い学びについて、本校は教師と1対1の学習が多い。特に対話的な学びを充実させるため、交流及び共同学習を積極的に進めることや行事における外部講師やボランティア等と話し合うことなど、対話の機会を拡大していく。			
② キャリア教育の推進	集団の中での学びを通して、各自が卒業後を考え、人間力を高めようとするために、他校や関係機関との交流活動を更に充実し、卒業後につながる体験活動を行う	全学部 寄宿舎	交流の目標回数に対する達成率が A： 80%以上 B： 60%以上 C： 50%以上 D： 50%未満	A 96%	小は計画以上の実施で105%、中普86%、理89%、寄89%であり、全体としては96%であった。荒天で実施できなかった交流もあったが当初に立てた計画をほぼ実施した。交流先を広げるなどして多様な経験を積む機会を増やしていく。
	行事や日常生活を通して、主体的に挨拶する態度を身につける。	指導課 全学部 寄宿舎	自発的に挨拶することや他者と積極的に会話できるようになったと回答する児童生徒の割合が A： 80%以上 B： 60%以上 C： 50%以上 D： 50%未満	A 93%	小100%、中普100%、理92%、寄86%であり、全体としては93%であった。今年度は中普で学校間交流、寄宿舎でベルマーク回収運動に新たに取り組んだ。今後は、交流活動事前打ち合わせシートを改善して交流における活動内容を充実させていく。
	行事や日常生活を通して、主体的に挨拶する態度を身につける。	指導課 全学部 寄宿舎	自発的に挨拶することや他者と積極的に会話できるようになったと回答する児童生徒の割合が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	A 93%	小75%、中普83%、理100%、寄100%であり、全体としては93%であった。挨拶週間の実施により、個に応じた指導の充実や児童生徒の挨拶意識の高まりが各々の目標達成につながった。今後もより主体的に挨拶する態度を育成していく。
	接遇マナー研修や進路を考える会を通してコミュニケーションの能力の育成を図る。	理療科	コミュニケーションに関する自己目標を達成した生徒の割合が A： 85%以上 B： 70%以上 C： 55%以上 D： 55%未満	B 83%	後期は接遇チェックリストを作成し、クラス毎に言葉使いの指導を行うことで、中間評価79%が最終評価では83%となり、コミュニケーション力が向上したと感じる理療科生徒が増えた。今後は学年間交流やマナー講習会を開催してコミュニケーション力を向上させていく。
学校関係者評価委員会の評価		・集団の中で学ぶなど多様な経験を積むために交流活動を充実させると良い。 ・小学部・中学部・高等部普通科の児童生徒対象にコミュニケーションを学ぶ機会があると良い。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・近隣の小立野地区の団体等との様々な交流活動を通じて経験を積むほか、同世代の仲間との交流を深めるために他の特別支援学校との交流活動を充実していく。 ・コミュニケーション力の育成は教育活動全体を通して行っていく他、交流の機会等で指導していく。			
③ 専門性の向上とセンター的機能の充実	歩行指導やロービジョン補助具活用に関する実践力の向上につながるために、実践事例シートを作成し、研修会等を行う。	支援課	実践事例シートを作成し、職員全体で共通理解できた児童生徒の割合が A： 100% B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	B 82%	歩行指導、ロービジョン補助具活用に関する実践を行った結果、小100%、中普100%、理療科67%で全体としては、82%となった。年度末までには全員の実践事例シートを作成し、誰でも閲覧・活用できるよう環境を整備する。
	県内の小中学校からのニーズを踏まえた視覚障害教育に関する研修の開催を県内の小中学校及び関係機関等に広く案内する。	支援課	ホームページ等を活用して、視覚障害教育の研修会についての情報発信回数 A： 5回以上 B： 3回以上 C： 2回以上 D： 2回未満	A 8回	ホームページには年間8回の研修会開催情報を発信するとともに関係機関へのメール配信などにより本校開催の研修会には70名の外部参加者があった。前期は7回実施し目標回数を達成してしまい、設定が適当ではなかったため目標回数を見直す。
学校関係者評価委員会の評価		・学校と医療及び関係機関等との連携を推進するため、外部の関係者も参加しやすいよう研修会開催日時の設定や開催時期の設定に工夫があると良い。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・医療関係者の参加者に配慮して木曜日午後の研修開催を検討する。また、今後も年間を通して研修会を定期的に開催していく。			
1 業務の効率化	各教員が所有する教材・教具を共有し活用しやすくするため、閲覧環境を整備して、教材準備に係る業務の効率化を図る。	情報係 全学部	教員が教材・教具を提供・活用した回数 A： 20回以上 B： 15回以上 C： 10回以上 D： 10回未満	A 21.0回	小15.4回、中普20.6回、理26.4回で全体では21.0回であった。単元終了後には教材・教具の提供をルール化したことで提供数が大幅に伸び、提供回数は、平均16.6回、活用回数は4.4回であった。教材教具の共有化を図り、業務を効率化していく。
学校関係者評価委員会の評価		・教材教具の共有による業務の効率化の他にも取り組めることに着手すると良い。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・教材作成の他に、校務分掌業務に費やす時間の削減のため、各課の業務をいつ、誰が行うのか明確にしたハンドブックを作成して業務の効率化を図る。			